【ウズベキスタン】

中央アジア近現代史に思いをはせながら

帯谷知可

ウズベキスタンは中央アジアの一国である。そうした単純な意味ではウズベキスタンの映画は確かにアジア映画なのだろうけれど、この国が一九九一年まではソ連の一部であり、そしてソ連型社会主義のもとでさまざまな近代化の経験をし、映画芸術そのものももっぱらそうした条件の下で発展してきたことを考慮するなら、一般的ないわゆる「アジア映画」のイメージとは少し異なる部分も抱えているということになるだろう。それは簡単に言うなら、国家の強力な後ろ盾と保護のもとで映画産業が形作られ、映画制作や映画人の養成も国家事業として行われる一方で、ここにももちろんイデオロギーを喧伝する役割が課せられたり、検閲・統制が及んだりしていたということである。

ウズベキスタンだけでなく、かつてソ連の構成単位であった「民族共和国」の映画は、各共和国の映画界の上に連邦中央の、すなわちモスクワの映画界が位置するという二重構造のもとに置かれ、全体としてソ連映画界を形作っていた。独特の芸術性をもつソ連映画の主流とはやはりモスクワで制作されるロシア語映画であったと言えるが、全連邦的な、あるいは国際的なヒット作品が民族共和国出身の監督によって生み出されたり、民族色を前面に押し出した作品がきら星のように登場したりすることもしばしばあった。

ソ連解体と独立を経て、数は少ないながらも現在のウズベキスタンで国際的な活躍をみせている映画監督たちも、基本的にはこうした環境のもとで映画の世界に足を踏み入れた世代が中心となっている。映画に関する専門教育はウズベキスタンの首都タシュケントとモスクワの双方で受けていることが多く、ウズベキスタン映画界では今なおそれがステータスでもあるようだ。

なお、ウズベキスタンにおける映画史と代表的な作品については、その成立から独立を経た最近の動向に至るまで、ソ連映画全体も視野に入れながら、井上徹氏が一連の解説を書いているので参照されたい(井上二〇〇三;二〇〇七;二〇一二)。

ソ連型社会主義時代の研究と映画

実は私はまったく映画通ではない。ここに原稿を書かせていただくのも少々おこがましいと感じているくらいである。私が最も関心を持っているのはロシア革命期の中央アジアの政治や社会であり、現在の国としてはウズベキスタンが主たる研究対象地域となるが、なぜかこれまで映画には積極的な関心が向かなかった。しかしつい最近になってから、ウズベキスタンの過去の映画をぜひ見て（そして集めて）おかなければならないと考えるようになった。それには二つのきっかけがあった。

ひとつは、中央アジアにおけるソ連時代の社会主義建設をテーマとするドキュメンタリー写真に地域研究資料としての関心を抱いたことの当然の延長として、同じテーマのドキュメンタリー映画に関心を持つようになり、長年にわたりウズベキスタン映画人協会の総裁を務めた映画界の重鎮中の重鎮、ドキュメンタリー映画監督マリク・カユモフ氏（一九一一―二〇一〇）にインタビューする機会を得たことである。彼自身が制作した数々のドキュメンタリー映画（例えばソ連時代の女性解放とイスラーム・ヴェールの放棄をテーマとした『パランジ』（一九七七）など）に俄然興味が湧いたことはもちろんなのだが、ウズベキスタンに大規模な映画館を建設するための費用がなく、そのための直談判に彼自身がモスクワに乗り込んでいったエピソードなどを聞くにつけ、ウズベク映画人の生きたソ連時代、社会主義時代の記憶に強く惹きつけられたのである（写真）。

写真 タシュケントの映画人会館（2012年11月撮影）。カユモフ氏がモスクワと直談判して建設されたと語ったのがこの建物である

もうひとつのきっかけは、社会主義的近代化に関連する研究プロジェクトについて旧知のウズベキスタンの歴史研究者と話していた時の、そのテーマならぜひ映画を素材にしてみたら、という彼の思いがけない言葉であった。それは文献研究に携わる研究者としてというよりは、社会主義時代を自ら生きた「元ソ連人」としての感覚からの言葉だったように思う。映画に反映されている望ましいソヴィエト・ウズベキスタンの姿や当時の社会の様子を抽出し、そしてそれらの映画をどのように人々が受け止めたのかをインタビューしてはどうかというのが彼のアドバイスであった。これは私にとってはそれまでまったく念頭に浮かんだことのないことで、新鮮な驚きを感じると同時におおいに納得したのである。

右に述べたような関心から、ここではウズベキスタンの近現代史に思いをはせることのできる三本の映画を紹介しよう。

『タシケントはパンの町』

古典的なウズベキスタン映画の、そしてソ連映画の名作としても名高い作品である。飢饉に襲われたヴォルガ川沿岸地方の貧しい村から、祖父も父も失い、母と弟たちを養わねばならなくなった少年がタシュケント（ウズベキスタンの首都）へ行けば穀物が手に入るとの噂を聞いて、列車にもぐりこみ、二千キロ離れたタシュケントへの旅に出るという「ロード・ムーヴィー的な味わいもある」（井上 二〇〇七：三）物語である。道中で、そしてたどり着いたタシュケントで、少年はたくさんの人々に出会い、逮捕されたり、ボリシェヴィキの人情に助けられたりとさまざまな経験をする。タシュケントで精いっぱい働き、ようやく自分のお腹を満たし、家族のために何がしかのものを携えて故郷の村に戻ってみると、すでに家族は餓死していた、という衝撃のラスト。やり場のない悲しみに打たれる。

タイトルにある「パンの」という形容詞は、「穀物がよくとれる」あるいは「豊かな」という意味ももつ形容詞である。映画の中で、葡萄畑にさんさんと太陽が降り注ぐシーンが特に印象に残っているが、中央アジアのオアシス地域の豊かさと美しさが、少年の故郷の貧しく悲惨なロシアの農村とあまりにも対照的である。ソ連域内では中央アジアはしばしば「疎開地」になったが、現在では間にいくつもの国境ができた。

まだ学生だった頃、東京でソ連映画の連続上映があったときに公開作品の中に含まれていて、見に出かけた思い出がある。今にして思えば、初めて見たウズベキスタン映画だった。原作A．ネヴェーロフの同名の短編小説は邦訳で読むことができる（ネヴェーロフ 一九八五）。

『UFO少年アブドラジャン』

日本における映画祭で公開された後に日本語字幕付きでDVD化もされており、おそらく日本で最も観賞する機会を得やすいウズベキスタン映画だろう。そのDVDパッケージには「傑作ハートウォーミングSFムービー」とあるが、原題に「スピルバーグに捧ぐ」とあるように、『E．T．』に触発されたものであるらしく、「親愛なるスピルバーグさん、ビデオ鑑賞会であなたの映画『E．T．』を見ました。いい映画でした。例の空飛ぶ円盤が私の村にもやってきました」というナレーションで始まり、常にスピ

ルバーグへの語りかけで話は進行する。ソ連時代のウズベキスタンのコルホーズ（集団農場）に少年の姿をした宇宙人が空から落ちてきて、純朴なウズベク人コルホーズ員バザルバイの家に受け入れられてアブドラジャンと名付けられ、そこから奇想天外な出来事があれこれ起こり、ソ連軍が宇宙人探索のためコルホーズへやって来たところで少年は空へ帰っていく、という粗筋である。

私にとっては、見るたびに何かしら新しい発見がある映画である。まず、この映画の制作自体が一九八〇年代半ばからゴルバチョフ書記長が推進したペレストロイカ（建て直し）のもとでの自由化の進展と、それに伴う資本主義世界とその文化との接触から多くのインスピレーションを得たものであることはスピルバーグのくだりでもわかることだが、アブドラジャンが受け入れられた家の末息子はブルース・リー（？）の空手の真似をしてみたり、ポーズを決めて「パナソニック」とつぶやいてみたりと、ペレストロイカ当時の若者の関心事をうかがわせる。また、全編を通じてウズベキスタンのコルホーズの様子がコミカルにデフォルメされており、俗物としか思えないようなコルホーズ議長への人々の素朴な、しかし絶対的な敬意は、地域共同体における権威のあり方や伝統的価値観を垣間見せているように思える。さらに、映画の中のウズベク語とロシア語の混じり具合も面白い。アブドラジャンに初めて出会ったバザルバイやその妻は、よそ者であることがはっきりしている謎の少年にとりあえずロシア語で話しかけてみたりする。ウズベク語とロシア語の両方がわかり、多少なりとも現地社会を知っている人には面白さ倍増の映画だと言える。

この映画の監督ムサコフは、この映画が日本で公開されたのを縁にウズベキスタン映画界の中で日本と特に強いパイプを持つ存在となっている。

『演説者』

ウズベキスタン独立後に制作された芸術映画として高い評価を受けているもののひとつである。舞台はロシア革命期のトルキスタン（ほぼ現在のウズベキスタン）、亡くなった兄の妻を慣習に従って受け継ぎ、三人の妻を持つことになった主人公イスカンダル。自宅にたまたま逃げ込んできたロシア人革命分子を助けたことが縁で、ひょんなことから「民族カードル」として採用され、ソヴィエト政権のアジ演説を職業とすることになる。仕事ではウズベク語やロシア語でソヴィエト政権の諸政策を声高に叫ぶのとは裏腹に、家に帰れば三人の妻のかいがいしい世話を受け、その妻たちは家の外では決してパランジ（イスラームのヴェール）を脱がない。やがて私生活の「ソヴィエト化」をも要請されるようになり、「公」と「私」の間で、「新たな価値観」と「伝統」の間で苦悩する主人公の姿が淡々と描かれる。私も注目しているソ連時代初期のウズベキスタンを撮影し続けた写真家M．ペンソンの写真がイメージとして多数挿入されている。

まさにソヴィエト的社会主義的な上からの近代化の現実の一端を掘り下げた映画だと言える。ラストシーンで車椅子に腰かけたまま力尽きた老イスカンダル。その手から落ちたのはソ連知識人必携のロシア語雑誌『新世界』、そしてそのページの間からこぼれ出たのはパランジをまとった三人の妻に囲まれた若き日のイスカンダルの写真だった。

一九九九年キノショック映画祭（黒海沿岸のアナパで開催される旧ソ連諸国による映画祭。当初はショッキングムービー＝体制批判映画が中心だった）でグランプリを受賞している。

ウズベキスタン映画のゆくすえ

独立から二二年目を迎えようとするウズベキスタンの最近の映画事情はといえば、あまり芳しいとはいえないのが実情である。ここで私が強調したようなかつてのソ連の影響は今後ますます小さくなっていくのだろうが、一般大衆はいわゆるボリウッド映画のようなメロドラマ的娯楽映像作品のほうに大きな関心があり、本格的な芸術映画にはほとんど国内市場もなく、資金調達も困難なようである。著名監督ももっぱら海外との協力のもとに映画制作を続けているようだが、最近はフィルムを使った映画制作はほとんど行われていないそうだ（井上 二〇〇七：五）。同時に、独立によって必ずしも完全に自由になったというわけではない、映画をはじめとする芸術全般の状況も関係しているだろう。ウズベキスタンの映画が東アジア、東南アジア、南アジア、西アジアなどの映画と同じ「アジア映画」の土俵に立つにはまだ時間がかかるのかもしれない。

◉参考文献

井上徹（二〇〇三）「中央アジア映画の活力――新しい名作群と製作現場」宇山智彦編『中央アジアを知るための六〇章』明石書店、一三五―一四〇頁。
井上徹（二〇〇七）「ウズベキスタン映画小史」『NFCニューズレター』第七五号、二―五頁。
井上徹（二〇一二）「映画――中央アジアとコーカサスの映画・映像文化」帯谷知可・北川誠一・相馬秀廣編『朝倉世界地理講座――大地と人間の物語　五　中央アジア』朝倉書店、三六六―三七〇頁。
ネヴェーロフ、A．（一九八五）大橋千明・大橋篤子訳『タシケントはパンの町』（十代の本セレクション）理論社。

映画リスト

『E．T．』……①E. T. The Extra-Terrestrial、②スティーヴン・スピルバーグ、③一九八二年、④アメリカ、⑤英語、⑥劇場公開、テレビ放映、DVD販売。

『ＵＦＯ少年アブドラジャン』……①Абдулладжан, или посвящается Стивену Спилбергу〔アブドラジャン――あるいはスティーヴン・スピルバーグに捧ぐ〕、②ズリフィカール・ムサコフ、③一九九二年、④ウズベキスタン、⑤ロシア語（映画タイトルおよびナレーション）、ウズベク語（映画中の主たる会話）、⑥中央アジア映画祭（一九九四）、ウズベキスタン映画祭（二〇〇七）、劇場公開、ＤＶＤ販売。

『演説者』……①Voiz、②ユスプ・ラジコフ、③一九九九年、④ウズベキスタン、⑤ウズベク語、ロシア語、⑥ウズベキスタン映画祭二〇〇二（二〇〇二）、ウズベキスタン映画祭（二〇〇七）。

『タシケントはパンの町』……①Ташкент—город хлебный、②シュフラト・アバーソフ、③一九六八年、④ソ連、⑤ロシア語、⑥ソビエト・シネマ・フェスティバル（一九八三）、ウズベキスタン映画祭（二〇〇七）。

『パランジ』……①Паранджа、②マリク・カユモフ、③一九七七年、④ソ連（ウズベキスタン）、⑤ロシア語、⑥未公開。

著者紹介

①氏名……帯谷知可（おびや・ちか）。

②所属・職名……京都大学地域研究統合情報センター・准教授。

③生年・出身地……一九六三年、神奈川県。

④専門分野・地域……中央アジア（特にウズベキスタン）近現代史・地域研究。

⑤学歴……東京外国語大学外国語学部ロシヤ語学科、東京大学大学院総合文化研究科（地域文化研究専攻）修士課程、同博士課程（中退）。

⑥職歴……東京大学教養学部助手（二七歳、任期三年）、在ウズベキスタン共和国日本国大使館専門調査員（三〇歳、任期二年）、国立民族学博物館地域研究企画交流センター助手（三二歳）、同助教授（三六歳）、京都大学地域研究統合情報センター助教授のち准教授（四二歳）。

⑦現地滞在経験……ウズベキスタン（三〇歳、二年、日本国大使館専門調査員）、ウズベキスタン（三五歳、八か月、文部科学省派遣在外研究員、調査）。

⑧研究手法……現地にしか存在しないアーカイヴ資料等の利用が最も重要であるが、自分の研究に直接関係がなくても可能な限り幅広くさまざまな人々の話を聞き、諸々のお付き合いをするように心がけている。現地では何事によらず人脈が非常に重要だからということもあるが、現地の社会的雰囲気を知ることが間接的に研究に生きてくる。最近は、社会主義時代の記憶に関するインタビュー調査も行っている。

⑨所属学会……日本中央アジア学会、内陸アジア史学会、ロシア史研究会、日本中東学会、アジア歴史地理情報学会。

⑩研究上の画期……一九九一年のソ連解体。研究対象地域に政治・経済・社会的大変動が生じ、その変動自体が研究対象となると同時に、現地へのアクセスが飛躍的に容易となり、フィールド調査を含む本格的な地域研究が可能になった。個人的には歴史研究を現在研究につなげるきっかけでもあった。

⑪推薦図書……小松久男『革命の中央アジア――あるジャディードの肖像』（東京大学出版会、一九九六年）。

⑫推薦する映画作品……『ＵＦＯ少年アブドラジャン』（ズリフィカール・ムサコフ監督、一九九二年、ウズベキスタン）。